

真実を「口にしない」ことで戦前も戦後も成り立ってきた日本社会

天皇自身による「人間宣言」は国民に大きな衝撃を与えたが、それは「それまで天皇を神として崇め、天皇のために戦争をし、天皇のために死ぬことが責務だと信じさせられてきた」からではない。

《天皇がただの人にすぎないこと》を全国民が知っていながら、誰もが《口にしないこと》を天皇自身が口にしたから、国民は大きな衝撃と驚きを感じたのだ。その衝撃と驚きは本当は、自分たちこそが口にしなければならなかったにもかかわらず、天皇の口からなされたことの反省に向かわねばならなかった。しかし、戦後の日本人にとって天皇の「人間宣言」がもたらす衝撃と驚きは外からのものであって、内へと向かわなかった。「人間宣言」が発される背景には、この詔書が国民に発表する体裁をとって、天皇の戦争責任問題が海外から追及される状況をかかわす狙いがあったことも考えられるが、天皇自身が口にしたことによって、天皇が現人神ではないことに決着がつけられたとしても、日本人が「口にしない」ことで現人神になってしまったことの問題は決着がつけられないままになった。

この「口にしない」という問題は、日本の敗北が決定的になった状況下でも、「降伏しよう」と誰もが口にしなかったことと重なってくる。山本七平は『「水＝通常性」の研究』でこう書いていた筈だ。

《この状態は、実は最高戦争指導会議のおエラ方でも青年将校でも同じで、前者は、みな内心では、だれかが「降伏しよう」と言い出してくれないかと、それだけを心待ちにしていた。いわば「陸軍が始めたのだから陸軍が言い出すべきだ、今日言うか、この次に言うか」と一方が梅津参謀総長に期待すれば、御当人は「軍人は最後までそれが口にできないのだから、だれかが言ってくれないとこまる。外務大臣は言わないのだろうか、今日言うか？ 明日言うか？」期待し合っていた状態である。一方、威勢のいい後者については、面白い例が小松真一氏の『虜人日記』に出てくる。それは無条件降伏と聞いた瞬間、東京の自分の家作が無事かどうかの心配を口にした、ある参謀の話である。“ぬいぐるみ”をとれば、彼の通常性的関心は、家作からの家賃と自分の恩給による平穏な生活だけなのである。》

この「降伏」についても結局のところ、45年8月14日午前、御前会議で天皇が反対論を抑えて終戦を決定し、翌8月15日正午に、天皇が前日に吹き込んだ「終戦に関する詔書」の録音盤が「玉音放送」として流されることで、決着された。戦争の降伏にしても、現人神の「人間宣言」にしても、最高戦争指導者をはじめとする国民のすべてが「口にしない」なかで、国民の外にいる天皇が口にして初めて事態が動き出すという有様であった。無能な体たらくであったというよりは、国民の誰もが「口にしない」ことによって成り立っている国家社会体制のなかでは、誰もが「口にしない」まま行きつくところまで行く以外になかったのであり、その中でただ一人、「口にしない」国民ではありえなかった天皇が口出しすることで解決するしかなかったのだ。

別のいいかたをすれば、戦争が終わって“ぬいぐるみ”をとれば、どんなにエラい戦争指導者といえども、「ただの人」にすぎず、そのことを本人がよくわかっているから、《家作からの家賃と自分の恩給による平穏な生活》が気になりはじめたのである。しかし、天皇だけが“ぬいぐるみ”を着ていなかったのも、戦争が終っても天皇制度が廃絶されないかぎり、天皇は天皇であらざるをえなかった。唯一“ぬいぐるみ”を脱ぐことのできない天皇が行った「人間宣言」が、では脱“ぬいぐるみ”宣言に等しかったか、といえば、けっしてそうではなかった。現人神天皇から人間天皇への転換であって、天皇であることには全く変わりがなかったからだ。もちろん、唯一“ぬいぐるみ”を脱ぐことができない点で、天皇は依然として「ただの人」ではありえなかった。

戦後、現人神天皇から人間天皇へと変わったが、日本人は戦前と同様に、そのことを口にしなかった。それは、「口にしない」ことによって現人神天皇がかたちづけられていったのとは異なって、人間天皇であることが誰にも了解されていたから、あえて口にしなくなっただけのことであった。もちろん、現人神天皇から人間天皇へと変わることによって、天皇と国民との関係、並びに天皇に対する国民の見方が変化していったけれども、日本人の思考の中心に天皇が座っていることは、日本人が意識しているかどうかにかかわらず、戦前も戦後も変わらなかった。明治期以降、日本の近代国家体制が天皇（制）を中心に築かれてきたことを考えるなら、日本が敗戦したぐらいで百年近くにわたって沁み込んできた日本人の思考様式が一変する筈がなかった。山本は更に、こう指摘する。

《以上の関係を一言でいえば、元来は「父と子」の間だけを規定する倫理が、臨在感的把握の対象を

「父」とし、そう把握する者を「子」として、その間の関係を規定するようになった——いわば、これによって、「父と子」の関係を、あらゆる秩序の基となしうるようになったということであり、それ自体としては、宗教的現象として特異な状態ではない。このような形で一つの体制ができあがったのは、図式的に言えば、仏教的基盤に儒教的規範が結合した結果といえるであろう。そしてこの体制が、徹底的に排除していくものは、「自由」と「個人」という概念である。個人が自由に事実を口にすれば、この関係は成り立たず、教義による拘束も成り立ち得ない。従って日本では、民主主義と社会主義という言葉は受け入れられても、自由・個人という概念は実質的には排除されねばならない。そして(…)民主と社会は、実は、戦前から天皇制に結びつく、強固な概念だった。そして個人が自由に発言し、個人として自由に行動すれば、日本の社会は、徐々にしかし非常に冷酷にこれを完全に排除して行った。ただし本人が転向し、定められた「父と子」の関係に入りさえすれば、その集団はすぐに彼を受け入れてくれた。治安維持法のみで処刑された者が一人いなくても、少しも不思議ではないし、また多くの人が、転向とともに有利な就職先まで世話をしてもらっても不思議ではない。改宗者はいずれの宗団でも逆に高く評価されるのだから——。》

「父と子」の関係を成り立たしめる「孝」の概念が、「主君と家臣」の関係を成り立たしめる「忠」の概念と、本来的には相矛盾するにもかかわらず、父が主君に擬せられ、子が家臣に擬せられることによって、強引に結合されていたが、敗戦によってその体制にひび割れが生じることになったかといえ、全くそんなことは生じなかった。この体制が戦後もそのまま温存されることにおいて、さすがに国民が「陛下の赤子」とされた戦前のありかたではなかったものの、ある年配層の日本人は昭和天皇に「慈父」のイメージを抱きつづけてきた。そしてこの体制は戦前と同様に、戦後になっても《「自由」と「個人」という概念》を徹底的に排除していった。裏返せば、《個人が自由に事実を口に》しがたいことにおいて、戦前と戦後はつながっていたのだ。つまり、「口にしない」ことは戦後も同様であり、「口にしない」ことにおいて従順であることが、依然として求めつづけられた。

結局のところ、日本人は戦後になっても《「虚構の世界」「虚構の中に真実を求める社会」であり、それが体制となった「虚構の支配機構」》の中に住みつづけていると言って、次のように論じる。

《虚構の存在しない社会は存在しないし、人間を動かすものが虚構であること、否、虚構だけであることも否定できない。従ってそこに「何かの力」が作用して当然である。それは演劇や祭儀を例にとれば、だれにでも自明のことであろう。簡単に言えば、舞台とは、周囲を完全に遮断することによって成立する一つの世界、一つの情況論理の場の設定であり、その設定のもとに人びとは演技し、それが演技であることを、演出者と観客の間で隠すことによって、一つの真実が表現されている。端的に言えば、女形は男性であるという「事実」を大声で指摘しつづける者は、そこに存在してはならぬ「非演劇人・非観客」であり、そういう者が存在すれば、それが表現している真実が崩れてしまう世界である。だが「演技者は観客のために隠し、観客は演技者のために隠す」で構成される世界、その情況論理が設定されている劇場という小世界内に、その対象を臨在感的に把握している観客との間で「空気」を醸成し、全体空気拘束主義的に人びとを別世界に移すというその世界が、人に影響を与え、その人たちを動かす「力」になることは否定できない。従って問題は、人がこういう状態になりうるということだけでなく、こういう状態が社会のどの部門をどのように支配しているかということである。演劇や祭儀の世界だけならそれは問題でないが、日本の場合、その通常性に基づいて一つの秩序ができあがるには、まず「空気の醸成」とそれを維持する「父と子の隠し合い」の真実の中に、これを求めざるを得ない。もっとも「求めざる」を得ないと言って、意識的に求める必要はなく、その通常性に基づいて行動して行けば、否応なしに、この秩序ができあがって行き、その秩序の中に安住していれば、それが普通の状態だと言うことである。》

天皇が現人神ではなく、《ただの人にすぎないこと》を知っていながら、《それを口にしないこと》は、ちょうど歌舞伎で《女形は男性であるという「事実」》を観客の誰もが知っていながら、その《「事実」》を大声で指摘しつづけないことと同じであり、天皇がただの人であることを《口にする者は非国民すなわち「日本人ではない」ということ》になるのは、演劇の世界で《女形は男性であるという「事実」》を大声で指摘しつづける者は、そこに存在してはならぬ「非演劇人・非観客」であることと、同じである。つまり、戦前の天皇制国家とは、天皇制を演出する者と観客の間で成り立っている「演劇の世界」にほかならなかった。しかもその「演劇の世界」は虚構を中心としてまわる現実の世界であり、その点が現実の世界の中に仕切られた演劇や祭儀の世界と根本的に異なっていた。